

辛夷



連載

今様花伝書

川瀬敏郎

撮影……野中昭夫

なぜ漢名がないかというと、中国に辛夷はあってもコブシはないからです。コブシは日本と韓国にしかなく、中国の辛夷は日本でいうところの木蓮（木蘭）らしい。そして、中国の木蘭はまったくべつの木だそうです。ややこしい話ですね。ついでにいえば、今回いけたシデコブシ（ヒメコブシ）は中国原産ですが、日本にも自生している地域はあります……やめましょう、もう。

コブシの名の由来は苔のかたちが拳のようだから、といわれています。シデコブシのシデは四手（幣。玉串や注連縄についている白い紙）で、ひらひらした花弁をみて名づけたのでしょうか。たしかに辛夷と木蓮（漢字にします。ごめんなさい、牧野さん）は似ていますが、花の気分はまるでちがいます。木蓮には辛夷のような清冽さがなく、ひとことでいえば玄人の花。人にみたてるなら、木蓮は押出しがよくて品格のある名僧、辛夷は恥じらいをふくんだ白皙の美少年といったところでしょうか。

北国では辛夷を「田打ち桜」とよび、その花が

辛夷のことでは、牧野富太郎博士が怒っています。「コブシはコブシであってかつしてこれを辛夷とは書くべからずだ」「全然漢名はないから、これを辛夷というのは絶対に間違っている」云々。たいへんな剣幕です。

[上]花=四手辛夷、黒文字
器=楳材(エルンスト・ガンペル作)
[左頁]花=四手辛夷、七竈
器=檍材(エルンスト・ガンペル作)
渋谷「MDS | G」にて(2点とも)





咲くのを合図に田仕事をはじめたとききます。辛夷が咲くころになればもう霜は降りないという経験にもとづいた、自然の暦です。辛夷の花が多い少ないかで、その年の豊凶を占う地方もありました。

「辛夷咲く、あのおか北国のか、嗚呼！」

さて。辛夷の咲く姿はじつに美しく、夜空を背景にたくさんの花をつけた大木をみあげると、白い花が雪のようで、「天からの贈りもの」という素敵な言葉を思いだします。しかし、それは立木だからであって、器にいけるとなると話はべつです。

残念ながら。

辛夷の枝はゴツゴツしていて、みために無骨です。しかも折れやすいので、枝をためて姿をとのえることができません。枝取りをして、春風を思われるしなやかな線をとりだしたいのです。花はいつたんひらくと一日で花弁がさがり、だらしないかっこになりますから、苔のうちにいておいて、花の笑みがこぼれてゆく様子をたのしんではいかがでしょう。

とりあわせには芽吹いたばかりの若々しい緑がふさわしい。少年と少女の淡い初恋を見るようです。董や一人静〔102頁〕といったやさしげな春の草花もよく似あいます。

古い時代に辛夷をいけたためしはほとんどなく、予楽院近衛家熙（一六六七—一七三八）が茶花にもちいた記録がのこっているくらいです。予楽院は後

水尾天皇の孫で、書画はもちろん花、茶、歌、香の道それぞれに一家言を有する、当代きっての文人でした。彼の言行を侍医の山科道安が記した『槐記』に、こんな一節があります。



ナレ。花ノ珍シキヲノミ好ムハ僻事也。

〔右頁〕花 || 四手辛夷、一人静
器 || シテノキ材(エルンスト・ガンペル作)

〔左頁〕花 || 四手辛夷、絹柳
器 || シテノキ材(エルンスト・ガンペル作)
渋谷「MDS」にて(2点とも)